

日商簿記 1 級&全経上級ダウンロード講座 工原 No.20【原価企画・品質原価計算】

収録日：平成 25 年 10 月 8 日

【出題実績】

日商簿記 1 級

全経簿記上級 158 回（原価企画）、159 回（品質原価計算）

	検定簿記講義	サク	スッキリ	教科書
ページ数	23	22	7	
活動基準原価計算	◎	◎	◎	
ライフサイクルコストニング	◎	◎	×	

◎説明あり、例題あり ○説明あり、例題弱い、△説明弱い、例題あり、×説明弱い、例題弱い
（「弱い」は「ない」を含みます）

試験委員である一橋大学教授の編である検定簿記講義で大きく取り上げられています。

理解しておけば少ない努力で満点が望める論点です。しっかり確認しておいて下さい。

No.18,19 ともレジュメは共通です。

日商簿記 108 回の類題で解説しております。

当社は活動基準原価計算を用いた製品原価計算を行っており、製造間接費の配賦計算のために、発注・受入活動、組立活動、検査活動、補修活動、出荷活動および工場管理活動の6つのコスト・プールを設けている。以下の資料にもとづいて、下記の問1から問4に答えなさい。

【資料】製品Xに関する年間計画データ

- ① 製品Xの生産台数は10,000台である。
- ② 製品X1台当たり直接材料費は、15,000円である。
- ③ 製品X1台当たり直接労務費は、6,000円（＝@1,500円×4時間）である。
- ④ 製品Xの製造には40種類の部品を利用しているが、各部品について年間50回ずつの発注を行う。当社では、1回の発注に対し平均して3,000円の発注費が掛かる。
- ⑤ 製品Xは全品検査を行っているが、1台当たり検査時間は20時間である。
- ⑥ 製品Xの製造では生産量の10%の仕損が発生するが、すべて補修を行う。
- ⑦ 製品Xの出荷は、年間30回行う。
- ⑧ 製造間接費の配賦計算に係るデータは次の表のとおりである。

コスト・プール	コスト・ドライバー	単位当たりコスト	製品Xに係るコスト・ドライバー量
発注・受入活動	発注回数	(1)	(2)
組立活動	直接作業時間	@1,200円	40,000時間（＝4時間×10,000台）
検査活動	検査時間	@20円	(3)
補修活動	仕損品数	@3,000円	(4)
出荷活動	出荷回数	@50,000円	(5)
工場管理活動	直接作業時間	@300円	40,000時間 （＝4時間×10,000台）

問1 上記資料⑧の表の空欄(1)から(5)に入る数値を答えなさい。

問2 当社は、上記資料を基礎として製品Xの製造単価を計算し、製造単価の30%をマークアップして、製品Xの販売単価を設定した。製品Xの製造単価および販売単価はそれぞれいくらか。

問3 問2の販売単価で製品Xを購入する顧客には、その購入後にもさまざまなコストが掛かる。すなわち、平均利用年数5年の間に、毎年の電気代3,000円と5年後末に廃棄コストとして2,000円が掛かる。更に購入2年後に故障が生じ修理代の掛かる可能性があり、その確率は10%である。その金額は、5%の確率で2,000円、3%の確率で6,000円、2%の確率で10,000円である。この場合、製品Xの取得から廃棄までのライフサイクル全体にわたって、顧客が負担するトータル・コストは、現在価値に換算していくらとなるか。ただし、割引率は年10%である。現在価値の計算には次の現価係数表を用いること。

年	1	2	3	4	5
10%の現価係数	0.91	0.83	0.75	0.68	0.62

問4 問3の条件のもとで、毎年の電気代が半額、廃棄コストがゼロ、更に修理代の掛かる確率が5%に減って、修理代が3%の確率で2,000円、2%の確率で1,000円になるとすれば、そのような製品Xの購入に対して、現在の顧客はいくらまで支払うであろうか。ただし、割引率は年10%である。現在価値の計算には上記の現価係数表を用いること。

(1)	円
(2)	回
(3)	時間
(4)	台
(5)	回

問2

製品Xの製造単価	
製品Pの販売単価	

問3

問4